

はじめに

「トントン先生」というフレーズに違和感をお持ちの方がいらっしゃるでしょう。実は、編者の一人の原朋邦の異名です。胸部打診をルチンに行うので、子ども達が診察をすることを“トントン”する、私のことを「トントン先生」と呼ぶようになりました。ある育児雑誌に「トントン先生は本日休診」という題でエッセイを5年間連載してもらったこともあり、少し情報が拡大しました。プライマリケアの場では、症状や所見の把握が重要だと考えての行為であり、日本外来小児科学会でも活動していました。他の編者についてご紹介しますと、児玉和彦さんは有志で立ち上げた小児診療ワークショップを中心とする会の活動の「小児T&A」,「HAPPY」,「CHEER」の中心メンバーであり、中村裕子さんも活動の有力メンバーです。数年前に、大雪で電車が止まるような日に児玉さんが私のクリニックに来てくださいました。語り合い、小児医療に対する認識や、価値観に共通部分の大きいことが確認でき意気投合しました。中村裕子さんの「CHEER」での活動の現場にも参加し、リーダーの活動、参加者の熱気に感動しました。

日米の文化の違いなどの差はあるものの、小児のヘルスケアの中で乳幼児健診の意義が大きいことは、「健やか親子21」,「Bright Futures」に示されています。乳幼児健診自体は、疾病（健康問題）の診断、その予防、健康増進、育児の助言と指導が柱となるものです。総合的な医学的知識だけではなく、心理学的、社会学的、倫理的な知識や技術を必要としています。それは医師としての経験以上に、意図的に学ばなければ得られないものです。基本は座学で学ぶとしても、行動変容につなげるには、ロールプレイ・シミュレーションなどの技法を用いての学習が必要でありかつ効果的です。

乳幼児健診に従事する医師にとっては、その医師の専門性が何であれ、一定水準以上の総合性が求められています。まして、プライマリケアに従事する医師は、常に優れた総合性が求められていることを意識しその習熟を追及しています。乳幼児健診の場には、特殊な場合以外は即座に用いることができる高度な医療設備はありません。成育歴や既往歴の収集、日ごろ研鑽した症状や所見の把握力、診断というよりも判断とも言うべきであろうが臨床推論を進める能力、対象の子どもや家族を支えるためのマネジメントやコーディネートできる能力が健診の質を高めます。それは日常の医療行為にも基本となるものです。健診の質を上げる努力は日常の医療の質の向上につながります。

本書を企画するにあたり、COVID-19流行まではフェイス・トゥ・フェイスで、流行後はメールで話し合いました。健診に臨む前に、得ておくべき知識や技法の多くの部分を、日ごろ実際に活躍されている方々に執筆をお願いしました。ハリソンの教科書にも記載されているように私ども医師はPerpetual studentであることを意識しながら、健

診の場での実際面の多くを編者が執筆いたしました。

巷間には、乳幼児健診についての多くの優れた書籍があります。屋上屋を重ねる意図を持っていたわけではありません。限られた時間枠で見落としのない健診を行うことを重要視し、本を読まれたことで、知識を得られただけではなく、行動変容に繋がる学習の契機になり、症状や所見の把握を重要視する医師のメタファーである「トントン先生」が沢山誕生されることを願うのが本書の意図するところです。

幸いに、意図を解した著者の協力を得ることができました。少し、変わった書籍になったと思っています。

羊土社の担当編集者の野々村万有氏、山村康高氏のご協力を得て、上梓させていただきました。必ずや編者、出版社の意図が活かされて、子どもたちや御両親への支援に繋がることを心から祈ります。

2021年1月吉日

年の功で編集者を代表して
原 朋邦